

2015年 5月 22日
人間・環境学会事務局

第 107 回研究会

「ロボットはいかなる環境になりえるのか? : その可能性と課題」

知覚・環境心理学者イッテルソンによると、環境は私たちを取り囲んでいて、その取り囲む環境から分化したものが環境物 (Environmental Object)、いわゆる物である。物には、自然物にくわえて、自然物を加工した人工物がある。

人類の進化の歴史は、人工物の歴史でもある。人類は、火を発見し、道具を切り出し、空間を創造してきた。そして、近年注目を集める人工物がロボットである。

ロボット工学者ブルックスが、お掃除ロボット『ルンバ』の原型として知られる昆虫型ロボットに実装した「包摂アーキテクチャ (Subsumption Architecture)」は、「表象のない知性体 (Intelligence without Representation)」とも呼ばれ、環境内でのふるまいからのフィードバックにより知能を構成する。ロボットは、環境内での人間の成り立ちを探索する興味深い対象であり続けている。

さらに、ロボットへの注目が加速しているのは、私たちの身の周りでロボットを見かける機会がめずらしくなくなったことが挙げられるだろう。コミュニケーションロボットや介護ロボットへの期待はとりわけ大きいように思える。

そこで今回、人間・環境学会の新たなテーマとして、人とロボットの関係に関する研究を紹介し、検討してみたい。

研究会は3部構成になっている。第1部では、会全体の方向性を示す。企画者である松本からロボットが私たちの周囲に加わっている事例の報告を通して、ロボットの可能性と課題を提示する。次に、久木田先生より、科学哲学の見地からロボットが人の生態環境において妥当な存在として位置づけられることへの可能性と課題について提示いただく。

第2部では、人の生態環境におけるニッチ (生態的地位) をロボットの構成・活用を通して探っている研究を紹介する。小嶋先生から、過度な情報を苦手とする自閉症児が通う療育現場にて、対人コミュニケーションの入口としてのミニマルなロボットの構成・活用について紹介いただく。次に、岡田先生より、ロボット単体では意味をなさない、周囲の環境や人のグラウンディング (支え) により成り立つ『弱いロボット』の設計・構成について紹介いただく。

第3部では、人工物であるロボットの人にとっての位置づけについて、動物や自然との比較を通して検討する。麻生先生から、話すロボットや動くロボットが動物とどう異なるのか、研究成果を通じたロボットの可能性と課題について話題提供いただく。次に、浜田先生より、人を取り囲む人工環境と自然環境のなかで、ロボットが切り開きうる可能性とその際の課題について話題提供いただく。

ロボットがどのような環境になりえるのか検討することにより、人と環境に関する理解の進展を期待したい。

記

□日時 : 2015年7月11日(土) 13~17時(受付開始12時30分)

□場所 : 近畿大学東大阪キャンパス 33号館 403号室
大阪府東大阪市小若江3-4-1

[アクセス] <http://www.kindai.ac.jp/about-kindai/campus-guide/access.html>

[キャンパスマップ] <http://www.kindai.ac.jp/about-kindai/campus-guide/higashi-osaka.html>

□参加費 : 学会員 1,000円、非会員 2,000円、学生 1,000円

□構成 :

[第1部 : 人の生態環境に加わるロボットの可能性と課題]

松本光太郎(茨城大学)、久木田水生(名古屋大学)

[第2部 : ロボットの生態環境を探る構成論的アプローチ]

小嶋秀樹(宮城大学)、岡田美智男(豊橋技術科学大学)

[第3部 : ロボットと動物、そして自然の比較心理学]

麻生武(奈良女子大学)、浜田寿美男(立命館大学)

[企画・司会] 松本光太郎

※座席の関係上、7月4日(土) 夕方5時までに FAXまたはE-MAILでお申し込み下さい。

事務局 FAX : 06-6879-7641

E-MAIL : mera@arch.eng.osaka-u.ac.jp

人間・環境学会第107回研究会 参加申込書

人間・環境学会第107回研究会に 参加します (名)

御名前 : _____

御所属 : _____

TEL : _____ FAX : _____

E-mail : _____